

ふるの 古野 さとし 慧 選手

フリースタイルスキー・スキークロス

初のオリンピックに臨んだ古野選手は1回戦6組目に登場。だがスタート直後に転倒し4人中4位、惜しくも敗退となった。試合直後のインタビューでも「ちょっと自分でもどうなったのか分からない。何もできずに終わってしまった。」と悔しさをのぞかせていた。

しかし今回の取材では「4年後のメダル獲得のためには良い経験になった。」と決意を新たにし、2026年のミラノ・コルティナ大会へ向けてのリベンジを誓った。

スペシャル・アクティビティ・ワーカー

大学在学中から所属先を探していました。企業に就職しながら選手活動をするのが理想だと考え、探していたところ、長岡市と協定を締結したUSEN-NEXTグループのセミナーに参加させてもらったのがご縁です。当グループは「長岡にしながら完全テレワークで東京の会社で働ける」という新しい働き方“Nagaoka Worker”を提言していて、これは自分の理想と合致するなと思いました。私の場合、半年近くヨーロッパを中心に海外を転戦していて、従来のお社は出来ませんが、時間場所を問わない新たな働き方は、アスリート活動と両立できると思ったんです。こういった自分の想いを伝えたところ「スペシャル・アクティビティ・ワーカー」という新たな制度を会社として作ってください、今回のオリンピック出場もサポートしていただきました。みんなで応援してください、本当に良い環境に恵まれたなあ、と思っています。

冬は大会や遠征などの競技活動、夏は東京のナショナルトレーニングセンターを拠点に、日中はトレーニングするのですが、夜や空き時間を活用してリモートワークという形で働いています。

時速90キロで駆け抜ける雪上のレース

スキークロスに出会ったのは小学校4年の頃です。もともと小学1年の頃から夏はBMX、冬はアルペンスキーをやっていて、その両方の要素が詰まった競技だったので、すごく興味が湧いたんですよ。

最初は国内レースに参加し始めて、高校から海外のレースを転戦するようになったんですけど、そこから、だんだんオリンピックを意識するようになりましたね。

競技の面白さは、やっぱり90kmというハイスピードの中で、ジャンプをしたり、ターンをしたりするエキサイティングなところですね。抜きつ抜かれつの白熱したレース展開は見る側も分かりやすく魅力的な競技だと思います。



自分の頑張りで、滑りで、感動を 与えられる選手に成長したい。



Profile

1999年長岡市生まれ。USEN-NEXTグループSC所属。青葉台小学校から上越教育大学附属中学校へ進学。小学1年から夏はBMX、冬はアルペンスキーに取り組む。BMXでは世界選手権入賞、アルペンスキーではインターハイ入賞を果たす。小学4年の時にスキークロスに出会い、高校2年のときナショナルチーム入り。2021年、世界選手権に出場。2022年の冬季北京オリンピック代表に選ばれる。兄は同じ競技で活躍する古野哲也（青葉台中出身）。

家族・チームの支え

小さいころ、兄の影響をものすごく受けていたと思います。小学6年まで長岡に住んでいたのですが、冬は土日のたびに市営スキー場とか色々なところに行って、朝から晩までずっとスキー三昧でした。

小学校の裏にニュータウン時計台公園というところがあり、そこで友達と一緒にジャンプ台とか作って遊んでいました。家の庭でもジャンプ台を作って兄と遊んでました。昔からアクロバティックでエキサイティングなのが好きなんです。(笑)

両親も、毎週末スキー場へ連れて行ってきて、好きなように取り組ませてくれました。まさかオリンピックに出るところまで、スキーをやるとは思ってなかったと思います。高校大学と海外に遠征すると、生活から資金面でも助けてもらいながら、一番応援してくれました。

そんな中で「ケガが一番こわいね」ということは言われていて、正直、結果よりケガしないで帰ってきてほしいって思ってるんじゃないかと思いますね。

兄とは1年中、常に一緒にトレーニングしたり大会に出たりしています。というのも、今は兄も含めてナショナルチームのメンバーで1年中活動しています。2018年の平昌オリンピックの後、須貝選手がこの競技に転向してきて、そこから本格的にチームでまとまってやるようになりました。それまでは選手が個々で大会に行ったり練習していましたが、トレーニング自体も質が上がってきて、量も増えて強くなっていきました。夏場のトレーニングは、東京のナショナルトレーニングセンターを拠点にされていて、1年中一緒にいるからこそ、お互いに追い込めるし、切磋琢磨できています。

4年後に向けてリベンジ!

これからの選手としての課題は、海外選手に比べ、まだまだフィジカル面が劣っているので、絶対的なパワーをつけるトレーニングをしていきたいですね。それと同時に大きい舞台ではメンタルも重要だと今回の北京オリンピックで改めて実感しました。スタート直後に転倒って、正直あまり無いケースです。後日、映像を見返すと、他の選手達もバランスをくずしたり、他のワールドカップより苦戦していた印象です。派手にいったのは自分だけでしたけど。要は、周りもやっぱり緊張はするんだなと思ったし、逆にメンタルのコントロールができれば勝算もあるなって思います。

オリンピック期間中は、長岡のみなさんから応援メッセージをいただいたり、本当に自分が競技する上で背中を押された気持ちです。私自身の小さいころを思い返しても、朝から晩までスキーをやっていたので、恵まれた環境だったなと思いますし、そんな環境を作ってくださった、携わってくださった皆さんに本当に感謝です。長岡で育ったからこそ、ここまでこれたなと思っています。

スキークロスは他の競技と比べても認知度が高くない中で、オリンピックで色んな人に見てもらえことが良かったです。私の成績は良くなかったですけど、それでも「感動した」って言ってもらえて、それが一番、自分にとっては嬉しかったです。スポーツの価値は「人を感動させることにある」と思いましたし、4年後のオリンピックでより多くの人に感動を与えられるような人へ成長したいなと思っています。

「スキークロス」って、どんな競技?

フリースタイルスキー「スキークロス」は4~6人が同時に滑り、バンクやウェーブ、ジャンプなどをクリアし、ゴールした順番を競うレース。決勝1回目では4人の選手が同時にスタートし上位2位に入ると準々決勝へ進出することができる。2010年バンクーバーオリンピックから正式種目となった。